

国 絵 図 ニ ュ ー ス

第 21 回 国絵図研究会 愛知大会のお知らせ

種田祐司先生（名古屋市秀吉清正記念館）のお世話で、下記のように愛知大会を開催します。ふるってご参加下さい。

【第 1 日目】 3 月 8 日（木）国絵図閲覧・研究会・懇親会

13:00～15:30 愛知県芸術文化センター愛知県図書館 正面ロビー集合（名古屋市中区三の丸一丁目 9-3）元禄尾張・三河国絵図、三河国関係境縁絵図熟覧

□名古屋駅から/地下鉄桜通線丸の内駅下車 1 番または 8 番出口より徒歩 10 分・名古屋駅市バスターミナル/グリーンホーム 5 番乗場から幹名駅 1 号（何行きでも可）愛知県図書館で下車すぐ

16:00～17:30 研究発表・総会（場所未定）

18:00～ 懇親会（会場未定 参加費 5,000～6,000 円を予定）

※宿泊は各自でご予約願います。名古屋駅～栄あたりならどこでも便利です。

【第 2 日目】 3 月 9 日（金）国絵図熟覧

9:30～15:00 名古屋市蓬左文庫 玄関ホール付近で集合（名古屋市東区徳川町 1001 番）

国絵図系統の各国写図熟覧

□名古屋駅から/地下鉄桜通線車道駅下車 1 番出口より徒歩 15 分・名古屋駅市バスターミナル/グリーンホームから基幹 2 号（何行きでも可）で徳川園新出来町下車 徒歩 3 分 □栄から/オアシス

21 栄バスターミナル 3 番乗場から基幹 2 号（何行きでも可）で徳川園新出来町下車 徒歩 3 分

11:00～12:00 徳川美術館 名古屋市東区徳川町 1017 番（蓬左文庫と建物がつながっている）

正保尾張国絵図を熟覧

注意：ここは熟覧の条件が厳しく、以下のことをお守りください。

1. 撮影は一切禁止です。
2. 熟覧の人数が 15 名以内という制限がありますので、熟覧希望者は同封の返信用はがきにその旨記入してください。また恐れ入りますが希望者は年齢を記入してください。希望者多数の場合は先着順とします。熟覧の可否については、事前（2 月 20 日ころ）にお知らせします。
3. 熟覧をしない方は、引き続き蓬左文庫で絵図を熟覧します。

同封はがきでお申し込みください。申し込み締め切りは 2 月 15 日必着です。

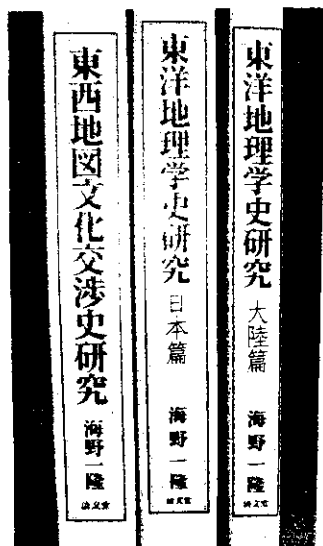
申込先：453-0053 名古屋市中村区中村町茶の木 2 5 名古屋市秀吉清正記念館 種田祐司

TEL 052-411-0035 メールアドレス：taneda-y@sf.starcats.ne.jp

海野一隆先生の思い出と学恩

川村 博忠

故海野一隆先生のわが国地図史研究に尽くされた業績の大きさは言うに及ばない。最後の3年間に3部作『東西地図文化交渉史研究』『東洋地理学史研究・大陸篇』『東洋地理学史研究・日本篇』を清文堂から年を追って刊行され、我々学徒に大きな遺産を残された。一人暮らしでお体の不自由さを厭わず、60年近くに及んで執筆された膨大な研究成果を分類整理して分厚い3冊の論文集としてまとめられたのは、まさに先生の学問に対する執念を感じさせる。



昨年11月に大阪大学の待兼山会館特別室で「海野先生を偲ぶ会」が催され、私もスピーチをすすめられたので、先生と交わった数々を思い出し、そのいくつかをスライドで映し出して、参加者に先生の面影を懐かしんでもらった。しかし多くを語る時間もなかったので、ここに私の先生との親交の一端を紹介してみたい。

地図史研究で高名であった大阪大学の海野一隆先生に私がはじめて直にお会いしたのは、富山大学で人文地理学会が催されたとき、同大学の楠瀬勝先生の案内で新湊市（現在の射水市）の石黒信由の生家を訪ねて、当家の土蔵に収納されていた大量の絵図・測量関連資料を見学した折であったかと思う。そのとき一緒に参加されていた高名な海野先生から「君が川村さんか」と話しかけられてうれしく感じたのが始まりであった。その頃私は国絵図や測量に関する

若干の論文を『人文地理』や『史学研究』などに報告していたので先生の目に留まっていたのであろう。あれは確か昭和56（1981）年頃であったように記憶しているので、先生との付き合いはそれから後およそ26年間に及んだことになる。

それ以来、先生との間で互いに研究論文の抜き刷りの交換がはじまり、先生から頂いた抜き刷りは分厚いファイル3冊にぎっしり詰まっている。私の書いた論文の抜き刷りを献呈するとその都度、先生から必ず貴重なアドバイスと励ましのお手紙を頂き、先生の学識の広さと深さに敬服するばかりであった。先生はワープロはできなかったもので、一点一画をおろそかにしないようなしっかりした自筆のお手紙にて、するどい指摘と的確なアドバイスをいただくのが常であった。

私が昭和61（1986）年に在外研究でウィーンに滞在していたとき、当地の国立図書館（古くはハプスブルグ帝室図書館）に世界的にも残存の稀な例のマテオ・リッチの木版「坤輿万国全図」の所蔵されていることを知って驚き、海野先生に連絡したところさっそく宮城県図書館蔵図の写真を送っていただき、それとの比較をするようにとの指示を受けた。ただし、横幅が3.6メートルを越すような大型の原図と手札判の写真とを見比べるのに苦労したことが忘れられない。しかし、この経緯を経て帰国後に『人文地理』40巻5号に「オーストリア国立図書館蔵のマテオ・リッチ世界図『坤輿万国全図』」（1988）を報告することができた。

ウィーン滞在を機会に私は当地の地図史研究者らとも知己を得たことから、帰国後は海野先生に連れ立って国際地図学史会議にも積極的に参加するようになり、先生との親交を一層深めることになった。先生とご一緒したのは第12回会議（パリ、1987）、第13回会議（アムステルダム、1989）、第14回会議（ウプサラ、1991）、第16回会議（ウィーン、1995）、第17回会議（リスボン、1997）の5回であった。第15回会議（シカゴ、1993）は私が山口大学教育学部附属中学校の校長を兼務していたため参加できなかった。第17回会議を最後に海野先生は第18回会議（アテネ、1999）には参加されなかった。

海野先生は *Imago Mundi* の日本代表 (National Representative for Japan) をなさっていたので、欧米の研究者に知己が多く、古武士の風格をもたれていた先生は会議の参加者のなかでもとりわけ目だった存在感を与えていた。先生は愛煙家で会議の合間に「一服やろう」といってタバコを吸われるときなどに見せられる満足そうな頬笑みが印象的だった。相手が喫煙家であることが分かるとよくタバコを交換して親しみをつくられていた。また、先生は鹿児島第七高等学校（造士館）時代を懐かしんでおられ、お話にはユーモアがあった。しかし、その温和人柄とは対照的に学問の世界では厳格ですでどかった。

先生は日本の地図史研究の成果が世界に十分紹介されていないことを悔しく感じられていたようで、自ら国際会議ではよく研究発表を行われていて、私にも発表をすすめられた。*Imago Mundi* のホームページで同誌に掲載の論文を検索すると、先生は①The Origin of the Cartographic Symbol representing Desert Areas(33号、1981)、②Government Cartography in Sixteenth Century Japan(43号、1991)、③Maps of Japan Used in Prayer Rites or as Charms(46号、1994)を寄稿されている。先生に促されて小生も①Kuni-ezu(Provinsial Maps) Compiled by the Tokugawa Shogunate in Japan(41号、1989)、②A papier-mache Relief Maps: The Bocho-Dozu from the Edo Era in Japan(49号、1997)2編の寄稿の痕跡を残している。

先生はシカゴ大学出版会から刊行された世界的名著 *The History of Cartography* の2巻(1994)に'Cartography in Japan'を執筆されている。平成元(1989)年のアムステルダムでの会議の折に、先生は同書の編者である J.B. Harley および David Woodward の両氏と大学近くのレストランで昼食を共にしながら執筆の打ち合わせをなさったが、そのとき私も同伴したのも忘れがたい。先生自身が学問には厳しいのに「欧米人は細かいことにこだわりすぎる」と愚痴られたのを思い出す。

平成15年(2003)5月久しぶりに先生にお会いする機会があった。久武哲也先生のお世話で甲南大学での地図史フォーラムに招かれて、先生は杖をついて会場へお出でになった。先生のユーモアに満ちながらも示唆に富んだ講演「私の歩んだ地図史研究の道」を拝聴したあと、近くのレストランでの懇親会で先生と親しくお話しすることはできたが、私にはこれが先生のお姿を見る最後になった。少し前に奥様を亡くされて、名張のご自宅で一人暮らしをなさっていた先生に、自活は大変でしょうと尋ねたところ「三度の食事に不自由はない。どこの店で安い魚を売っているかも熟知している」「もともと家内の作る弁当よりお父さんの作る弁当がおいしいなどと子供たちにほめられたほどだ」などと笑い飛ばされていた。

海野先生のご逝去は大阪大学の小林茂氏よりの知らせで知った。先生のご逝去は昨年(2006)5月の連休中であつた。その3～4か月前に私は先生との間で連絡をとりあっていただけに、突然の訃報は青天の霹靂であつた。

大阪にお住まいのご子息に問い合わせたところ、弔いは近親者のみで済ませ、他からの香典などはいっさい辞退するようというのが先生の遺言であつたという。人様の世話になることを嫌われて介護の申請なども行わず、最後の頃には郵便局などの用足しには車椅子を使われていたという。この数年、先生とのやり取りはほとんどが FAX にて行うようになっていた。そして先生より FAX の文字は大きくして送信するようにと要望されていた。ところが昨年(2006)は元旦に年賀状を受けたあと、1月13日に先生からの分厚い角封筒が郵送されてきた。その中のお手紙によると、例のように達筆なペン字で「正月早々ご無理を願わねばならない」との書き出しではじまり、*Imago Mundi* に掲載の Chronicle および Bibliography の原稿締め切りは例年11月頃であるのに、今回は今頃になってその依頼が届いた。しかし自分は目がかすれて文字が読みきれず、ほとんどお手上げの状態であるので、担当の Campbell 氏に1月中旬に届くように原稿を書いて送ってほしいとの要請であつて、Campbell 氏より先生宛の封書便が同封されていた。合わせて先生が長年任じておられる *Imago Mundi* 日本代表の後任として小生

を推薦しておくからとのことだった。

この要請にしたがって、先生書きかけの手書きの原稿に若干の追加をして1月18日に速便でロンドンの Campbell 氏に送付した。要件を済ませたことを先生に FAX で報告したところ、1月20日に先生からお礼の FAX が送られてきた。その返信で少し驚いたことは、私は FAX の文字をかなり大きくしていたのに、先生からはルーペを使っても読みづらいので、これからはもう一回り大きな字で送ってほしいとの要望だった。先生の視力は私が想像していた以上に悪いのだということを改めて思い知らされた。その後2月13日に至ってまた先生からの FAX が届いた。私が郵送した大分県立博物館の絵図展図録への礼状と Tony Campbell 氏から National Representative 交代の承諾があったとの知らせであった。そして先生からは「*Imago Mundi* 参加国の一つとして日本の名が抜けていることは国際的には均衡のとれないことであり、是非ともご活躍くださることを期待しています」との励ましの言葉が添えられていた。先生から送られてきたこの FAX が最後となり、その2か月半後に先生は永眠された。

5月30日に *Imago Mundi* 編集者の C. Delano-Smith 氏から海野先生の逝去の真偽の問い合わせがあり、Vol.59に Obituary を書くように依頼された。神戸大学の長谷川孝治先生より Campbell 氏へ連絡が行ったとのことである。海野先生とロンドンの編集者とのやりとりでメールの使用ができなかったことが不便であったようである。私は下手ながらメールはできるが英語が苦手で、海野先生の Obituary を書くのに編集者からの細かい質問に四苦八苦した。そして研究社の英和・和英両大辞典のページをめくるのに肩こりと疲れを感じながら、ようやく7月に Unno's Obituary をロンドンに送信した。

長谷川先生はリスボンでの第17回、アテネでの第18回国際地図学史会議およびその後の会議にも引き続き参加されており、*Imago Mundi* の編集者らとも面識があるので、海野先生の後任として National Representative を引き受けていただくようお願いしたところ承諾を得た。したがって私はすでに70歳を越す高齢で、これからは国際会議への参加もおぼつかないうえ、来年(2007)には2度目の大学を退職することを理由にあげて、長谷川先生に交代することの了解を London に求めた。その返事として9月2日 Tony Campbell 氏から届いたメールは次の通りであった。

It is slightly ironic that just as you and I have been communicating so happily over your writing of the Obituary for Prof Unno, you announce your retirement from *Imago Mundi*! However, as Tony has already said, we understand perfectly. . . . May I take this opportunity of wishing you all the best possible for the future...good health and long and active life.

私は海野先生の思い通りの意向に応えることができずに内心じくじたる思いである。ただ、日本の地図史研究を諸外国へ紹介して研究の交流を促すべきとの先生の願いは、私個人へ託されたものではなく、わが国の地図史研究者すべてへの期待であり鞭撻であると思う。「東西文化史交渉」こそ先生のたどりつかれた究極の研究テーマであった。先生の歩かれた道を続けて歩く後継者は必ず現れるであろう。(2007.1.25 記)

(追記) 編集者へ上記の拙文を提出したあと、海野先生のご子息隆史氏より先生の遺作『日本人の大地像』(大修館書店)の献呈を受けた。先生が生前に出版を手がけられていた書が旧臘刊行成ったものである。

■ ニュースの発刊が大変遅れましたことをお詫び申し上げます。▼不眠症ではありませんが、下関に来て夜中に起きることが続きました。その原因は、関門海峡を通る船の汽笛でした。
ニュース編集担当・磯永 和貴 〒751-0807 山口県下関市学園町2-1 東亜大学
Tel.0832-51-5177 E-mail isonaga@toua-u.ac.jp